OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞高山善行著『日本語モダリティの史的研究』
Author(s)	米田, 達郎
Citation	語文. 2002, 79, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

高山善行著『日本語モダリティの史的研究』

米田達郎

テンス・アスペクトや指示詞などについては現代語を対象として精緻な報告がされており、それらの成果は古典語を対象とした研究にも応用されている。それに対してモダリティは現代語に関する研究は進んでいるが、古典語を対象とした場合は必ずしも十分とはいえない状況にある。それは古典語を対象としたモダリティ研究が個別語や意味論を中心に論じられることが多く、構文的さらには体系的に論じられることが少なかったことを思い合わせるとすぐに理解されるであろう。本書はこのような研究状況に対して、古典語、特に平安時代（以下中古語とよぶ）の「判断のモダリティ」について現代語と対照し、構文的に考察を行う。中古のモダリティ形式を体系的に論じている点で画期的な内容である。

本書は、第1部　文とモダリティ形式（第1章　モダリティ形式の承接関係、第2章　従属節とモダリティ形式、第3章　係り結びとモダリティ形式、第4章　中古語モダリティの階層構造、第5章　疑問表現とモダリティ形式、第6章　仮定表現とモダリティ形式、第7章　否定表現とモダリティ形式、第8章　文表現とモダリティ形式）、第2部　モダリティ形式の特性（第1章　ナリ論争の学史的意義、第2章　連体ナリと終止ナリの差異、第3章　連体ナリと体言ナリの差異、第4章　ベシの多義性をめぐって、第5章　メリ、終止ナリとテンス、第6章　ムとマシの対立をめぐって、第7章　ラムの特質、第8章　ザラム・ジ・マジ）、付章　叙法副詞の構文的機能と意味、以上の構成からなる。

第1部では、モダリティ形式の相互関係、従属節・係り結びとモダリティ形式とについて考察を加え、中古語モダリティの階層構造を明らかにしている（第1章～第4章）。これは文構造の観点から中古語のモダリティを捉えようとしたものである。次いで文表現の観点から、疑問表現・仮定表現・否定表現とモダリティ形式との関係を論じている（第5章～第8章）。第1部は第2部の基礎となるものであると同時に、中古語のモダリティ形式の全体を見渡すための総論となっている。

第2部では、個々のモダリティ形式について考察を加え、そして第1部での成果に立ち戻り中古語モダリティの体系化を図っている。これは第2部の各章に共通する方法である（第1章は除く）。第2部では、まず「ナリ」の問題を中心とする（第1章～第3章）。第1章ではいわゆる「ナリ論争」を取り上げ、近世以来の研究をまとめる形で「ナリ」に関する現時点における研究の課題を意味・構文などの面から浮き彫りにしている。第2章では、「連体ナリと終止ナリ」がモダリティの相互承接や係り結び、従属節内でどのような振る舞いを見せるかを検討し、その結果、「連体ナリ」を二項を結合するコプラとし、「終止ナリ」を判断のモダリティとする。さらに第3章では、研究の盲点となっていた「連体ナリと体言ナリ」との関係を論じている。ここでは「連体ナリと体言ナリ」とが意味的にコプラであるとする立場を認めつつも、構文機能に差異があることを指摘する。構文機能の差異とは「体言ナリ」が従属節中に生起するのに対し、「連体ナリ」は生起しないということである。そして、「体言ナリ」は節構成レベルのコプラで、「連体ナリ」は文構成レベルのコプラで

あると結論づける。第4章以下では「推量の助動詞」である「ベシ・メリ・ム・ラム・ジ・マジ」などを取り上げ、それらの構文的特徴や意味などについて論じ(第4章〜第8章)、第1部での成果を踏まえて中古語モダリティの体系を構築しようとする。そしてこれらの章でも場合に応じて現代語の研究成果を援用することで、従来の研究方法では捉えることの出来なかった側面を明らかにすることに成功している。例えば、第7章では準体句中にモダリティ形式全般が生起しにくいのに対して「ラム」は生起するという事実に着目して、「ラム」を準体句との関係で考察する。そして、「ノ―カナ構文」や「ノ―ナリ構文」との比較から「ラム」は準体句に含まれずに、準体句の外にあるという仮定を提出する。ここで現代語のスコープの概念を援用することによって、「ラム」が「連体ナリ」相当の機能、つまりモーダルのスコープを拡大する機能を有していることを指摘し、先の仮定の妥当性を強調する。第7章は古典語にとどまらず現代語の理論をも応用し、「ラム」のあり方の一つを構文的に明らかにしており、著者の論法から導き出される結論は非常に刺激的であり、史的対照という方法の有効性を改めて思い知らされる。

本書では、各章に問題点が明らかにされており今後の研究の方向性が示されている。先にも述べたように、モダリティの体系が古典語で十分明らかにされてこなかったということを踏まえると、このことは今後の研究に大きな示唆を与えてくれている。古典語モダリティ研究にとって必読の書となるであろう。

(二〇〇二年二月二〇日発行、ひつじ書房、三三四頁、本体価格一二〇〇〇円)

――本学大学院博士後期課程――